

## 1. 研究目的

自然界において、資源は使い捨てられるものではなく再生して循環する。しかし豊かな時代に暮らす私たちはそのしきみをよく実感していないため、資源を大切にすることを忘れがちではないだろうか。そこで、循環を実感してもらい、自然の資源を大切にすることを広めたいと考えた。

## 2. 調査と分析

生活に身近なごみである生ごみの堆肥化について調べた。生ごみは家庭で出るごみの約30%を占めるが、個人でも行えるほどリサイクルが簡単で、有効利用できることから、近年再利用が広がっている。

実際にコンポストを使って生ごみをリサイクルしている人に感想を尋ねたところ、「ごみが減って楽」という意見の他に「生き物にえさを与えている感じで楽しい」と堆肥化の現象そのものを面白がる意見もあった。

また人工栽培の技術についても調べた。今の技術では、店内に置けるほどのスペースでも人工栽培が行え、また水耕栽培が主だが土を使ってもできるものもあることがわかった。

楽しんで行え、コンパクトな空間でも可能なことから、食品を使った循環を組み入れた空間を提案することにした。

## 3. コンセプトの立案

「環境意識向上のために循環を体験してもらうジュースバー」

普段環境問題を意識していない人でも、体験型で面白い店として利用もらえるように、ターゲットユーザーは活動的な働く女性とした。また設置場所はそのようなユーザーがよく行動する場所として都心の駅の地下や連絡通路などを考えた。

## 4. デザイン展開

・実体験としての店内空間

ごみが土に還り、その栄養で新たな植物が育つという流れを実際に体験してもらうことで、環境について考えてもらう空間にした。

客が自ら「調理する」「還す」という循環の過程に参加することで、より実感を持つことができ

る。各テーブルにジューサーを設置し、客がそれぞれ簡単な調理を行う。またその調理で出た絞りかすを、設置された電動コンポストに捨てる。隣に設置してある容器で、土に返っていく様子を見ることができる。

・循環を実感するための仕組み

循環をわかりやすく理解できるように、環状にゾーニングを行った。客が店に入ってから出ていくまでに育てる→調理する→食べる→捨てる→還すというプロセスを見たり体験することができる。メインの動作は環状の什器で行えるようにし、内側は従業員のスペース、外側は客のスペースと区切った。

・情報発信の役割を持つ店舗

外壁はガラス張りとし、外からも店の特徴である栽培装置や環状の什器を目立たせ、資源の循環を体験できる店だということをアピールする。

## 5. 完成図



## 6. 結論

ターゲットユーザーである働く20～30代の女性に意見を聞いた。循環を実感できるかどうかを聞いたところ全ての人から実感できると思うとの答えをもらった。

しかし、もっと参加型にしないと実感がわかない、働いている女性が時間をかけてジュースを飲むシーンが少ないとの意見を多くもらった。時間をかけてでも使いたいと思われる店になるよう工夫をすべきだと思った。

## 7. 参考文献

「図解 よくわかる植物工場」  
高辻正基 日刊工業新聞社 他